

---

Blue;HEAd

ケーシン

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

Blue·HEAD

### 【NZコード】

N2165Y

### 【作者名】 ケーシン

### 【あらすじ】

麻帆良学園女子中等部2・Aに転入することになった青春中毒・諦観系男子中学生の話。

身体は東で経歴は西、心は中立の主人公。  
でも色々と巻き込まれる。何が悪いって、転入したクラスが悪かつた。仕方がないから今日も諦め、青春探して奔走する。

### 以下注意事項

大規模な原作ブレイクはしないけど、イベントの半分くらいはオ

リジナル

アンチが読みたい方、主人公無双が読みたい方にはオススメできません

作者の知識は偉大なる先駆者様たちの作品から得ています  
二次創作初心者なのであしからず  
それでもOKな方はどうぞ。

## 001・青春を探せりの會、会員たちは今日も（前書き）

「ネギま！」の一次創作を読みたいけど、「テンプレ転生 オリ主  
最強無双 ハーレム」という展開は飽きてしまったという方にオス  
スメ……になるといいんだけど、結局は作者の力量次第なわけで。  
ぶっちゃけ作者は上記の感じの人だから、そういう人にも楽しん  
でもらえるように作つていくつもりです。

## 001・青春を探そうの会、余興たちは今口も

三月上旬、放課後の同好会室にて。

僕たち「青春を探そうの会」のメンバーは集まり、同好会唯一の三年生であり、今月をもって中学を卒業するマヒル先輩の送別会を行なうことになった。

つまりは、現在、送別会の真っ最中だつたりするわけで。

「俺の門出を祝つて、乾杯！」

この場合、主賓が乾杯の音頭をとるのは果たして正しいことなのだろうか。なんて疑問は頭の片隅に放置。

せっかく買つてきた炭酸ジースを振りに振りまくつて部屋中よじまくつている某M先輩も放置。コンビニで買つのに身分証の提示が求められる場合がある、高価な液体の匂いが混じつている氣もするけど放置。

掃除はみんなでやりましょう。

主賓？ 知らないよそんなの。

僕も「乾杯」といつて、黒い液体が入つてゐる三百五十五ミリリットルの赤い缶に口をつける。黒蜜にあらず。イメージ的には、がぶ飲みすると同じくらい身体に悪そうな飲み物だけど、こつちは骨までしみてボロボロになつてしまいそう。

それはともかく、普通「乾杯」つて「合唱」みたいになるものじやないんだろうか。

僕たちの「乾杯」は見事な「齊唱」。  
そつちの方が僕たちらしいけど。

とりあえず一緒にいるだけで、向いている方角はバラバラ。且つすものは同じはずなのに。正しい道かも確かめないままに独走してる。でも、一緒にいる。

たぶん、この空気が心地良いんだと思う。

マヒル先輩もサバサバも、自分勝手に進んで自分勝手に他人を巻き込んで自分勝手に迷惑をかける。けど、決して内側まで踏み込んでこないし、踏み込ませない人たちだから。

こんなことを考えているのは僕だけで、このことをみんなに話せば笑われてしまうだろう。

けどさ。

少しくらい、いいじゃないか。

だってこの場所はもうすぐなくなってしまうのだから。

「エリイに隙あり！」

「えー？」

二方向からの同時攻撃により、エリイこと僕、だんば江利は砂糖過多の海へと沈んだのでした。  
めでたし、めでたし。

「さらばだエリイ、君のことは忘れないぜ」

妙に恰好つけて去っていく爆弾魔。ジース

サバサバはいつもみたいに田隠しでカップ麺を作ろうとして火傷しているみたいだし。

何がいけなかつたのかって、まずあなたの思考回路がいけないと思います。「カップ麺＝青春」の等式が成り立つあなたの頭の中がそもそも問題なんです。

「『お前なんとかしろよ』みたいな田で見られても……」

かの有名な麻帆良学園女子中等部1・Aの一員であるサバサバは、はつきりいつて超がつくほどの美少女だ。そんなサバサバに冷たい目で見られると、なんだか僕が悪いような気持ちになってしまふ。けど、僕のせいじゃないよね？

机の上のカップ麺の残骸＆お湯はサバサバだし、その他は爆弾魔のせいだし。

このカオスをどう收拾しようと……。

「あー、もう！ メンドくさい……！」

そうして僕は爆弾魔にジョブチェンジした。  
脈絡がない？ 知らないよそんなの。

激しい銃撃戦だった。

ノルマンディーさんは結構平気な顔をしていたが、一個小隊に満たない僕たちからすれば、死戦ともいうべき闘争だった。

特筆すべきはマヒル隊長らによる一段構えの戦法だろう。ひとりがフルタブを弾き、敵を圧倒し、田くらましの役割を果たす。もうひとりはその間に缶を振つて弾を装填、相棒が弾切れになったところで発射。攻めに転じようとしていた敵の、がらあきになつた急所

をねらう。攻撃は最大の防御。大技を放つた後の硬直時間を味方がカバーするという、格闘ゲームにも通ずる、古来より伝わる戦法。長篠くんも真っ青だつたはずだ。

他方に目を向ければ、片手でプルタブを開ける技能を隠し持っていたサバサバの立ち回りは圧巻の一言であろう。「刀流ならぬ一缶流は僕らの度肝を抜いた。

目隠しでカツプ麺を作る器用さ（成功率30%）は伊達ではない。孤軍奮闘した僕たちだが、残弾数の問題で戦略的撤退をせねばならなかつた。

「やりきつたぜ」

マヒル先輩は甘い海に沈み、満足そうだった。

「……」

サバサバは戦いの爪跡を、いつそ冷徹さを含んだ瞳に映していた。いつだつて悲しみや虚しさは僕らの心に付き纏うものだ。それが鬪争者の宿命。

彼女の古くからの戦友であつた携帯用小型ガスコンロくんは重症を負い、電気ポットくんは戦死……。

前々から不調を訴えてはいたのだ。

僕もサバサバも、そんな状態にあつた彼を無理に戦地に送り込む

ような真似はしたくなかった。

けれど戦況はそれを許さなかつた。

目前に迫つた前線。守るべき者たちの存在。電氣機器としての矜持。そして、自分こそがサバサバの相棒なんだというプライド。……ベッドに横たわつていることは、できなかつたのだろう。

戦友を失つたのはサバサバだけではない。

「諭吉……英世……」

僕の諭吉が溺死した。レシートに抱かれた彼はいつもと変わらない表情をしていて、それが余計にくやしくて。

英世は三人も昇天された。無駄死にだつた。割り勘の弾代と戦闘服の整備代だつた。

「青春つて、なんだるーな」

「アヒルくせに偉そー、たそがれでいる暇があるならせつと片付けるあほ」

今日も今日とてサバサバの毒舌（？）は絶好調。ポットを壊されて機嫌が悪いのだろう。ちなみに「アヒル」というのはマヒル先輩のあだ名みたいなもの。マヒル先輩はアヒルが好きらしく、アヒルのストラップをじやらじやらさせていたりする。右耳に光るアヒルピアスは、ちょっとどうかと思つ。

さつきマヒル先輩にポットを弁償してもらおうと、サバサバがカツアゲを試みていたけど、がま口ならぬアヒル口の小銭入れを渡されていた。

「いやー、昨日英世に愛想つかされちゃって」「……悪趣味」という噛み合わない会話があつたりなかつたり。

サバサバは一重の意味で嫌な顔をしていた。

ちなみに、僕の英世さんがまたひとり一時的に拉致されて財布から去つていつてしまつたのは言うまでもないことである。割り勘の話はどこへ行つたのだろう。事後報告はいけないと思います。

床を「じーじー」し、窓をふきふき。

時折マヒル先輩がぶつぶつ不満を垂れて、サバサバが律儀につっこむ。嫌な顔してばかり、嫌な顔大会開いちゃつてるメンツで大掃除。

そんな平和な夕刻。

これが青春なのかはよく分からぬけれど、なんとなく大切だつて思う。

時間を無駄にして、金を無駄にして。  
自分が立つている場所の価値すら知らなくて。  
でも。

遠い未来から現在を振り返つたときに、あのとき自分は「生きていたんだつて、そんな風に思えるような今なんぢやないかなつて思う。僕にとっての青春はそんな感じだから、僕はこの部屋の扉を叩いたんだと思う。

「アヒル、窓はちゃんと桟まで拭く  
「細けえな。年末の大掃除じゃないんだから

文句をいいながらも桟を丁寧に拭くマヒル先輩。この人なんだかんだ言つてサバサバを可愛がつてゐるから強く出れないんだよね。で

もそれ以上に、ドガツクモビのシスコンで、救えないりじこナビ。

「年度末のおーそーじ」「

「……うまくないよ、サバサバ」

ちょっとだけ得意顔をしていたサバサバに突っ込まざるをえなかつた。本人は僕の意見をガン無視する方針のよう。ちょっと悲しい。

「しかし、サバサバがここまで掃除にこだわると、ちょっと意外だったな

ちゅうじ窓を一通り拭き終えたところでもマヒル先輩が言った。

確かに、僕もその意見には同意。

「こだわりはないけど、出て行くときの綺麗がいいから。もう一ヶ月もないし」

「は？」

マヒル先輩は困惑した顔を見せ、

「俺はともかく、お前らはまだまだこう使うんだろ？　出て行くって、なんだよそれ」

「ううん、私は同好会をやめない」「

生まれそうになつた認識の齟齬にサバサバは即座に対応した。けれど、一瞬だけ僕のほうに視線を向けた彼女は、そこから先を言いよどんでしまう。

そこで僕は彼女の意図に気づいた。  
やめたいわけじゃない……。

僕だって同じ。でも無理なんだ。

だからガラにもなくためらうサバサバに代わって、

「Jの同好会は今月をもつて解散します」

それはマヒル先輩抜きで話し合つて出た結論だつた。

規則の緩い麻帆良では、所属する生徒が同じ学校の生徒のみの場合、同好会の設立に必要な最低人数は二名だ。しかしさすがに学校を越えて設立する場合の最低人数が二名というわけにはいかないらしく、三名となっている。むしろ、基本的には最低三名以上必要なところを、同校の生徒のみならオマケで二名にしてくれているというのが正確な同好会法成立の経緯だろう。

当たり前のことであるが、女子校に通うサバサバと男子校に通う僕とでは学校が違う。

マヒル先輩が卒業していなくなれば、三名の定員を割つてしまつ。その場合、新しく同好会に入つてくれる人員を獲得しなければ、同好会は解散、この部屋は僕たちの手を離れる。  
この場所は僕たちだけの聖域だつた。

僕たち以外の人間に踏み込ませる気は、ない。

「知つてますか先輩。三名つて三人分の名前が必要つて意味なんですよ」

「だからそれがなんだつて」

「同好会の最低定員は三名です」

僕たちだけの聖域の、僕たちだけの青春。

大人にも子どもにも見えない、僕たちだけの、ひとりよがりなりアルだから。

いつだつて現実つていう壁は無表情に僕らを阻む。その壁に沿つてレールが走つていて、僕にはその上を進むことしかできない。

冷酷とか残酷とか言えるほど悲劇じゃない。この出来事を嘆けないくらいには、僕は悲劇つてやつが大嫌いだった。

ちょっとだけしんみりする。

でもすぐにそんなシリアスな空気はマヒル先輩が吹き飛ばしてくれる。

だつてこの人は爆弾魔だから。

「そつか、そうだよな。最低三名だつたな」

「はい」

「学校を越えて設立する場合、三名だつたよな」

わざわざ言い直したマヒル先輩に嫌な予感。

爆破された壁の破片は、僕にふりかかることもしばしば。

「確かに、もうひとつ、定員に関する条項があつたような気が」

わざとらしく結論を先延ばしにしてニヤニヤと僕を見下ろすマヒル先輩。彼の言いたいことを予想できてしまつた自分が嫌になる。できるのか？

……できるんだろーな、この人なら。

「アヒル先輩にしてはナイスアイデア」

「だろ？」

「今日一日は先輩つて呼んであげる」

不機嫌だつたはずのサバサバの笑顔を視界の端に捉えて、もう僕は白旗を上げるしかなくなつていた。

## 001・青春を探せりの会、余員たちは今日も（後書き）

いかがでしたでしょうか。

……とか偉そうに言えるほど文字数書いていないわけですが、主人公が2・Aに転入するきっかけはこんな感じ、ということで、第一話でした。

感想は気軽にお願いします。

感想を書くと……。

作者が喜びます。二次創作にかまけて学業をあらそかにします。学力が下がります。日本人の平均学力が10のマイナス8乗くらい下がります。大多数の人の学力が相対的にアップ！？つまり受験生にオススメ。四捨五入は恐ろしい兵器です。

〔冗談はさておき、作者の脳内は な感じなんで、ときどきエリイくんも迷走すると思います。

それでもOKな方は今後もよろしくお願いします。

## 002・ハーレムイベント（笑）

春休み。

小説にすれば上下巻、映画なら一時間のアニメ映画にできるほど  
の「アヒル♂s麻帆良大妖怪」の戦いがあつたとかなかつたとか（  
サバサバ談）。

一年ぶりの里帰りをしていた僕の知らない間に事態はかなり進ん  
でいたらしく、始業式の前々日に麻帆良に帰ってきたときにはもう  
取り返しのつかないことになっていた。

具体的には、男子寮から僕の居場所が消滅していたのが、まず一  
点。部屋にあつたはずの私物は綺麗さっぱり消えているし、そこそ  
こいい関係を築いていたはずのルームメイトには「なんでお前がい  
るの？」みたいな目を向けられるし、その他大多数の男子生徒から  
は親の敵みたいに見られた。

いや、知らないわけじゃなかつた。  
知つていたさ。

だつて九月くらいに募集要項配られたもん。すぐ資源ごみに出し  
たけど。

「男女共学化のためのテストケース」

……だつたと思つ。

詳しい内容は省くけど、麻帆良学園女子中等部二学年の各クラス  
にひとりずつ男子を放り込んで観察をするという企画だ。なんでも  
五、六年に一回くらいのペースで行なわれる名物イベントらしい。  
毎回なにかしらの問題が起つて共学化が白紙に戻つてしまふのに、  
こりもせず行なわれるから「ハーレムイベント（笑）」などと不本  
意な名称で呼ばれることもしばしば。ちなみに2・Aの担任である

ダンディおじさん高畠先生も、テストケースの被験者なんだとか。で、僕の学年でちょうどそのテストが行なわれるらしくて。見事、「当選」したらしい。

僕は申し込みをしていないはずなんだけどな……。

十中八九マヒル先輩の仕業だろうけど。

だつて僕の行くことになつた2・Aには、もうひとり男子生徒が入ることになつていて。つまり、僕とそいつで計二名。各クラス一名って要項に書いてあるはずなのに。

サバサバは、「アヒルと麻帆良大妖怪がバトルした」とて言つてたけど、妖怪つて学園長のことだよね。学園長に直訴できて、さらには申し込みすらしていない僕をテストケースにねじ込んでしまつマヒル先輩つて、一体何者なんだ。

居場所のなくなつた男子寮にいる間は、「なんで弾場が……」とか「俺のハーレム計画……」とか、そんな低くて小さな声がいたるところから聞こえてきて、正直怖かった。

うん。僕が「マヒル先輩爆発しろ」と思つたのは言つまでもない。むしろ屋上で叫んだ。そしたら「リア充爆発しろ」との合唱が返ってきた。残された寮生たちの心の叫びだつた。無駄にそろつていた。いつ練習したんだあいつら。

ど、どうか。マヒル先輩。

なんでよりによつて美少女ばかりの2・Aに行くことになつているんですか。しかもなんでそのこと寮のみんなにバラすんですか。サバサバと同じクラスだし、知り合いもいるから、他のクラスに突つ込まれるよりは馴染めるかもしれないんですけど。それでも2・Aはないです。恨まれ方がハンパないです。テストケースに「当選」した、僕と同じ境遇の人たちからすら恨まれるつてなんですか。恨みますよ。

……陰陽師ではない僕の怨念が通じたのかは定かではないが、マヒル先輩は籍が男子高等部に移ったその日に退学届けを出して、一日も登校することなく高校中退の最終学歴を得たらしい。

#### 現在はリアル自宅警備員。

警備の場は週一で深夜のコンビニに移ることだが、志望動機が「某少年誌のフラゲのため」って、よく面接通つたな、おい。というかコンビニってフラゲできるのだろうか。マヒル先輩本人に聞いても「知らん。フィーリングだ」とか意味不明な返答をいただけただけであった。大丈夫なのか、あの人。本屋でバイトしろと思わなくもない。

#### ちなみに。

この時期を境に、深夜のコンビニでバイトをしている大学生が「可愛いんだけど、カツプ麺にお湯を注ぎすぎてボットコーナーのまわりを水びたしにする中学生くらいの女の子がいる。片付けるこちらの身にもなつてほしい」という愚痴をこぼすことがなくなつたといふ話があつたりする。

#### そんなこんなで始業式。

幸運にもテストケースの被験者に選ばれた男子生徒一十余名プラス僕は、二千人を越える女子生徒の集団が整列する、その脇の小スペースに肩身の狭い思いをしながら（そう思っていたのは僕だけだったのかもしれない）、並んでいた。

新入生のうち、中等部からの転入組が某ぬらりひょん先生の後頭部の長さにござわづくなんて恒例行事もこなしながら、無事に閉式となつた。

その後、各自のクラスに移動していく女子生徒の大群のかたわら、二年の学年主任である新田先生に引率され、特別教室棟にある教室に移動した。そこで諸注意が書かれた冊子を受け取り、一時間ほどその冊子を片手に注意事項に関する話を聞いて、いよいよ教室に向かうことになった。

……のだが。

ほぼすべての男子生徒が、教室内でホームルームを行なつていた担任教師に任せられていくのに対して、なぜかA組の前だけは素通り。

そのまま新田先生に連れられて、廊下を歩いていく。  
確かに、この先には応接室や学園長室があつたはず。

残つたのは僕と男子生徒（かなりのイケメン）がひとり。A組以外に転入することになつた生徒はみんな、もうクラスの輪の中だ。  
隣の男子生徒は涼しい顔をしているが、彼はこうなることを知つていたのだろうか。正規の手続きを踏んでいない僕は、彼とは対照的に内心ハラハラしまくつっていた。学園長室で学園長直々に糾弾とか、僕のチキンハートには洒落にならない。

マヒル先輩だけじゃなくて、学園長にも呪いの電波を送つておくべきだったのだろうか。でも、相手はぬらりひょんだから効果は薄いかもしない。実際に効果があつたら、それはそれでやばい。戦争の火種というかなりヘヴィーな副産物ができるから。

大前提として僕は陰陽師じやないというオチ。

精神安定剤の錬成にかなりたくさんの方を支払つた気がする。

温度とか。

で、いつの間にか学園長室の前にいるわけで。

「学園長、今日付で一年A組に転入する、神海レイジと弾場江利の両名をお連れしました」

新田先生が扉に向かってそう言つと、「いじ苦勞<sup>こうら</sup>じゃった」との学園長の返答。

イケメンは「コーミ」というのか。珍しい名字、初めて聞いた。

新田先生はイケメンと僕に一声ずつ励ましの言葉をかけてから職員室に帰つていった。

厳しい人という印象しかなかつたけど、意外と生徒想いの教師なのかもしれない。

イケメンは僕を一警して鼻を鳴らした後、物怖じせず学園長室に入つた。イケメンの態度にむかついた僕は、イケメンが開けた扉をあえて一度閉めてから蹴破つて学園長室に入つたりはせず、肃々とイケメンの後に続いた。

そんな冷めた目で見るなよ。

「ふおふおふお、よく来たのう一人とも」

好々爺のように笑う学園長。その笑顔の裏で、一瞬にしてこの部屋に結界を張るあたり、油断ならない人物である。

学園長の斜め後ろに控えた高畠先生は、微笑してイケメンに小さく手を振つていた。おい。それは公私混同じゃないのか？

イケメンも関係者なのかよ。

……まあいいや。

しかし、なんだそつちか、と安心する。

どうやら僕は糾弾されるために呼ばれたわけではないらしい。

「樂にしてくれて構わんぞい」

僕は休めの姿勢。

イケメンはなぜか髪をかきあげた。……なんですよ? 様になつて  
いるのが憎らしい。高畠先生も苦笑するくらいなら突っ込めばいい  
の!」

「『氣づいてあるとは思うが、ワシが呼んだのは魔法生徒としての君  
らじび』

ふざけてんのかこのぬらりひょんは。

「ふお!?

ぬらりひょんが驚く。

あ、やっぱ。そういうえばマヒル先輩に言われてたっけ。ぬらりひょんは読心術が得意なぬらりひょんだから気をつけろって。ぬらりひょん悔りがたし。

「……」

「どうかしましたか、学園長

「いや、なんでもないぞい。といひで弾場くん、協会からの連絡は届いておらぬか?」

「僕の方には何も

「そうじゃったか……。つむ。時間もないし、まずは紹介からはじめるよつかのう。こちらがA組の担任の、高畠・T・タカミチ先生じや。NGO団体『悠久の風』にも所属されておる

渋さが五十パーセントアップ(当社比)してゐるな、最後に会つた時より。

「はじめまして、江利くん。レイジくんは久しぶり  
「お久しぶりです、タカミチさん」

イケメンの豹変振りに驚く。なんだこいつ、いきなり無垢な少年  
っぽいキャラになつたぞ。わつきの髪かきあげキャラはどうこに行つ  
たんだ。

でも突つ込まない。そんな空氣じゃない。

そんな瑣事よりも僕はどうするべきなんだろう。一応、高畠先生  
と僕は初対面なんだよね。でも「はじめまして」と言つのはゼミ  
ヨーだし。

とりあえず会釈。

「……ども

なんかすこべ無愛想になつてしまつた気がする。

「そして、同じく『悠久の風』所属の、神海レイジくん」

学園長の説明に納得。つまりイケメンは高畠先生の後輩なわけね。  
……そここのイケメンは髪をかきあげるな。

「よろしくしてあげようじゃないか。弾場くんだけ  
「弾場江利、関西呪術協会所属だ。よろしく」

差し出された右手を取る。

こんなところで握力勝負をする気はないのですぐに離したが。  
ちょっとそこ、残念そうな顔をしない。僕は非力なの。てか、ウ  
ザイケメンなのか熱血少年なのか、キャラぶれてんじゃねーよ。

「紹介も終わつたところで、弾場くん」

「はい」

「君には今日付で魔法生徒として活動をしてもらひことになつた。引越しの「じた」たで連絡が遅れてしまつてゐるよひじやが、これは協会も了承済みのことじや」

「はあ……」

「ワシリとしても、一般生徒として入学したとはいえ、西に所属する者をただ放置するわけにもいかなくてのう」

……そういうことか。

僕もそつと長くは「普通の」学生生活を送れるなんて思つてはいなかつたけど、一年が限度だつたか。嘆いても仕方ない。遅かれ早かれこうなることは、分かつっていたことだし。

「警備に入つてもう一つのはま来週からじや。それまでこは確認をしておぐのじやだ」

「はい」

「……それで、ここからが本題なのじやが

学園長は一拍置き、

「神海くんと弾場くんにはペアで活動してもうひとつになつた

この流れなら普通そう来るわな。

そここのイケメンが「なー?」とか効果音付きで驚いている理由が分からぬ。

「学園長!/? 僕にこのHセ外国人と組めとおっしゃるのですか」

うわー。その本音は聞きたくなかった。

エセ外国人って何さ。僕はれっきとしたハーフだ。髪を黒に染めて、目にも黒のカラー・コンタクト入れてるから、エセっぽく見えるかもしれないけど。

それにエセ外国人だからチーム組めないって理解が追いつかないんだけど。西の人間にはそういう奴もいるけども。イケメンは東：…というか世界のフィールドで活動するNGO所属のはずだろ。

それと、本当にどうでもいいことだけど、一人称俺なのね。イケメンだし、私とか僕とかだと思った。それか我輩か。

あ、想像したら笑えてきた。

イケメンが髪かきあげながら「我輩は……」つて。

「ふ

いや、今の僕じゃないからね。  
うつむいてる学園長だから。

「き、決まったことは、決まったことじや。決定は覆りん」「しかし……！」

「ぎ、逆に、聞くが、神海くんは何が不満なんじや？」

あー、耐えてる耐えてる。

「俺は、」

(我輩は、)

「ふ

僕の脳内補完でまたしても吹き出しそうになる学園長。

読心術やめればいいのに。

「学園長？」

「な、なんでもないぞい。続けてくれい」

「……俺は、西に所属している弾場を、背中を預けるほど信頼する  
ことはできません」

不信感を表しながら続けるイケメン、……「……」。誰に対する不信感かは言つまでもないだろ？

「一ミの言葉を補うなら「西に所属しているくせに、外国人の血  
が入つている弾場は」となるだろう。極論を言つてしまえば、西洋  
魔術師を目の敵にしている関西呪術協会にとって、外人というのは  
すなわち排除すべき敵。それだけに、外からは僕の存在がすぐチ  
グハグに見えるらしい。

「そつは言つてものう、弾場くんと組む適任者が神海くんくらいし  
かいないのじやよ。神海くんは正式には東の所属ではないし、使う  
術も西洋魔術ではないと聞く。弾場くんが敵対する理由はないのじ  
やよ」

「確かにそつかもしれませんが……  
「分かつてはくれぬか？」

結局、その間に「一ミが頷く」とはなかつた。

高畠先生は出張から帰ってきたばかりで、学園長への報告などがあるひしき、「一ミ」と僕は一足先に学園長室を辞して廊下で待つことになった。

「気ままずいと思つていいのはどうやら僕だけのようだ。

「一ミは裏の関係の話が終わった途端、イケメンに変わった。精神がイケメン（笑）なのだ。一重人格を疑うくらいに。

「弾場くんも運が悪い。この俺と同じクラスになつたのが運のぬきだったな」

高笑いを始めるイケメン。

「うわーはつは、て。何その笑い方。

そんなに髪かきあげていたら、前髪にだけダメージがちょっとずつ溜まつていつて中年になつたときに生え際の後退スピードが上がる……なんて事実があるかどうかは別にして、とりあえずそっちの方が面白ううなので、そつなることを願つた。  
ただし僕は陰陽師以下略。

「キリもせいやい頑張りたまえ」

せんせー。イケメンの言つてることが分かりません。僕は一体何を頑張ればいいのですかー。

ハーレム計画？ ああ、納得。

いや、僕は作らないよ。といつか作れないし。

問題を起こさなきやいいけど、彼。むしろイケメンはイケメンだから、問題を起こすところまでたどり着けなかつたりするのだろうか。

「まあ、誰一人渡さないが」

現実を見よつ。

「A組は俺のものだ」

イケメンが一匹、バカが一匹、アホが一匹、変質者が一匹。  
おまわりさんこいつちです。とりあえず、のべ四匹捕まえてください。

おまわりさんの代わりに高畠先生がやつてきて、イケメンが半分  
くらい後輩モードになった。イケメンは後輩なのでトコトコ歩く。  
高畠先生は親鳥だ。それはともかくイケメンはイケメンなのでこんなことをしていてはいけないと思います。現行犯逮捕できないのは  
社会の損失です。

……うん、バカは僕のほうだった。

ただし僕は以下略。おまわりさんがやつてこないのも、うなづける。

意味不明？ 僕もどこに行きたいのか自分でも分からぬ。

「この階段を使うと職員室があるから。困ったことがあったらいつも  
でも相談に来てね」

丁寧な説明恐れ入ります、高畠先生。  
でもあなた出張ばかりで滅多にいなはずでしょ、なんて野暮な  
ことは言わない。社交辞令のようなものなんだよつじ。

僕は高畠先生に連れられて、行きたいがどつかはともかく、3-Aの教室に向かっているわけだ。

廊下が長い。一学年二十クラス以上あるから仕方ない、諦めが肝心。そこから三分ほど歩いてやっと到着。そりや、職員室からそんなに距離があるわけないか。

ちょっとだけ開いたドアから聞こえてくる、わいわいしゃつきやと騒がしい声。

わー。すじくワクワクしない。

苦笑しながらドアを開けようと手を伸ばした高畠先生。しかし直前でイケメンがそれを制止する。

「うるは、俺が」

その恰好つけは必要ないと思つ。

紳士っぽく言つてゐるけどやつてゐること全然違つから。  
というか氣づけ。上を見る。……やっぱ見るな。直進しろ。  
ただし以下略。なんかもう色々とアレだ、原型がない。それでも願いは聞き届けられ、イケメンは待ち構えるトラップにチャレンジしていった！

結果、全弾命中。

加害者さんたち歓声上げてるけど、それあなたたちのターゲット違つから。転入生だから。

高畠先生と僕は廊下でその様子を見ていた。

苦笑しているくらいならフォローしてあげたらどうですか。もしかしてこれが「悠久の風」の教育方針なんですか。

確かに、あれがかわせないのはちょっと問題だけど。

でも、落下してきた金ダライを頭で受け止めて、そのままバランスを保つてるのはすごいと思つ。けど、それ必要なの？ 僕には相似できない。シュールすぎる。てかなんで髪をあげる動作したのに金ダライが落ちないの。神秘だわ。

一人、廊下に立ち止まつて教室に入りあぐねていると、イケメン（+水+チョークの粉+頬と額におもちゃの矢）が教卓を叩いた。かなり大きな音がして教室が静まる。だけど金ダライは落ちない。

「世界は平凡か？ 未来は退屈か？ 現実は適当か？ 安心しろ、それでも生きることは劇的だ！」

有言実行で劇的なイケメン。

それでも金ダライを落とさないイケメン。

やりきつた……つて顔をしているイケメン。

生きることは劇的だよね。分かるよ。でもそれこのメンツ前にして言つことじゃない。現在進行形であんたの生を劇的にしてるのはA組の生徒だから。

あと、その顔は弾幕をかわせるようになつてからしてほしかった。高畑先生と僕の心がひとつになつた瞬間、だつたはず。

髪をかきあげようとして、ちょっと恰好すぎて金ダライに手が当たり、結局落としてしまうイケメン。なんか煮え切らない。せつかくならそのまままでいろよ。

金ダライが床に転がつて、がらん、と特有の音を立て。

A組の時間が流れ出す。

途端に騒がしくなる教室内。

やつと室内に入つていく高畑先生。

僕もそれに続くべきなのか迷つたけど、迷つてる間にタイミングを逃して廊下に取り残されてしまった。

帰ろうかな。

「はいはい、みんな静かにー」

高畠先生の一聲で、だんだんとボリュームが下がっていく。しかし完全に静かになるまで一分近くもかかりました。さすがはA組。

「話は聞いてると思うけど、A組には一人の転入生が来る」とになりました

いえーい、どんづん、ぱふぱふー。

最初のはともかく後の「一つぱざー」で鳴ったんだ？

「一人目が、ひらひらの彼、神海レイジくん」

イケメンはそれをやめなさい。内容はもう面倒だから言わない。  
というか仮にも高畠先生はあなたの先輩だろ。なんで黒板に自分の名前書かせてるんだよ。自分で書けよ。

高畠先生が「『ひうみ』ってどういう字だっけ」とチヨークを持ったまま思案する。でも結局思いつかなかつたようで、ふりかえて尋ねようとした、ちよひらひらの時、

「お前ー！」

トイケメンが声を上げた。険しい顔をして、右手で誰かを指し示している。

廊下からではよく見えない。

そつと教室内をのぞいて見ると、

「……サバサバ？」

最後列、金髪幼女の隣に座っているサバサバを振り返っている生徒が多数。我関せずの態度を貫く生徒も数名。ちなみにサバサバもそのひとりで、眠たげな目をしている。

……サバサバ、キミが事件の中心人物っぽいよ。

あ、サバサバの目がぱっちりした。

僕に気づいた様子。先にイケメンに気づくべきだろ。教卓を指さす。じじじ、と、半開きの目だけが動く。再びぱっちり。やっとイケメンの存在に気づいたみたい。

「お、お前！」

どうやらテイク2をやってくれるらしい。唐突に始まつたテイク2だったが、ほとんどの生徒が即座に対応。みんなの温かさに感謝だよ本当に。

こてん、とサバサバが首を傾ける。  
状況が理解できないらしい。

「……転生者、か？」

さつきまでとは打って変わって、ゆっくりと息をはきだすような、  
慎重なイケメンの声。

周りの誰一人、イケメンについていけなかつた。「てんせーしゃ」つて何のこと？ な空気が流れる。  
でも誰一人、口を挟まなかつた。

二人の間には周りには分からぬ何かがあるのだと信じて。

「あ、あなたは！」

ついにサバサバの返答。

空気が引き締まる。緊張の一瞬。期待が膨らむ。

「……ぶ、ぶ、仏教の勧誘はおこ、おこお断りです」

沈黙。

なんかもう、僕は出でいかざるをえなかつた。

「サバサバ、もういい。もう頑張らなくていいだ。楽になつてもいいんだよ」

サバサバは半開きだつた目を、ついに完全に閉じた。

彼女が何を得て何を失ったのか、それはきっと彼女にしか分からぬ。

それから一時間は怒涛の質問タイムだつた。

転入生であるはずの僕が、サバサバのことをいきなりサバサバとあだ名で呼んでしまったのがいけなかつたらしい。僕とサバサバの関係について根掘り葉掘り聞かれた。ツインアホ毛センサーを持つ生き物が「ラブ臭」とうるさかつたけど、僕とサバサバはそんな関係じやない。でも、こういうものはどれだけ本人が否定しても無駄なもので、翌日には某パパラッチが号外を発行したとかしなかつたとか。

イケメンもイケメンだけあつて色々と質問を受けているみたいだつたけど、どこか調子悪そつた。

元気出そづ。

最後まで、誰一人として彼の「転生者」発言に触れなかつたのは優しさゆえか、自分たちには荷が重いと判断してのことかな。

なにはともあれ。

そんな感じで登校一日は幕を閉じる。

はずだつたのだが……。

## 002・ハーレムイベント（笑）（後書き）

イケメンのあの台詞は「めだかボックス」より。  
イケメンくんには「ソングフレでいてほしい」という作者の願いが込めら  
れています。

### 003・苗くんと仲間な愉快たち

「神海くんも弾場くんも転入のことで色々あつて疲れているだらうから、今日のところはそのくらいにしておきなさい」という皿の高畠先生のお言葉があり、質問攻めから解放されて、はや一時間。ちょうど昼食時である。

で、僕はその昼食時を早速クラスメイトの女の子と過ごしているわけだ。

僕の手が早いわけではない。

古くからの知り合いだったってだけで。いわゆる幼なじみ。

「えーくん、どないしたん？ そんな仏さまみたいな顔して」

「……ちゃんと頂いただきつてつけようよ。そうじゃないと僕は、一回までしか許さない人になっちゃうよ」

「それは困るなー」

からからと笑う僕の幼なじみさん。具体的にはぬらりひょんの孫。でも人間。和服が似合う京美人。でもミニスカ制服。知らない間にとびきりの美少女になっていたんですけど、近衛木乃香さん。

えーくんこと僕は教室から出て行こうとしたところで、捕獲されてしまったわけです。木乃香の背後には鬼が見えた。デフォルメされていて一頭身だった。頬を膨らませても微笑ましいだけです。見慣れていますから。

そしてちょうど昼食の時間だったために喫茶店へゴー。

触覚のようなアホモセンサーを頭部に持つ早乙女、略してアホ女（もしくはアホセンサー）が「ラブ臭」と反応したせいで黄色い歓声が上がるし。

イケメンには睨まれるし。「よくも俺の木乃香を……」つて、木

乃香はお前のものじゃないから。とこつかもう呼び捨てなのね。転入初日で初対面のクラスメイトの名前覚えてるのはすこいと思つけど。

そしてパパラッチ朝倉のニヤニヤ笑いには寒気しか感じなかつた。「二股」「修羅場」という不穏な単語は僕の聞き間違いであることを祈りたい。転入早々二股男のレッテル貼られるのはキツ過ぎる。ただでさえ女子ばかりなんだから、そんなことになつたら学校が地獄だ。僕は女の子と付き合つたことすらないのに。

未来のことを見えていても仕方ない。

それより現在のことだ。

木乃香は眩しそうに笑顔を僕に向けていた。さつきからずっと世間話ばかりをしているのだが、そんな話をするためにわざわざ僕をここに連れてきたわけじゃないってことくらい恋愛経験皆無な僕でも分かる。

言わなければならぬことも、予想はついている。

でも、なんなんだろ？、この状況。  
そこかしこから視線を感じるんですけど……。

見覚えのある後頭部とか、聞き覚えのある声とか。あと見覚えのある前髪かきあげとか。いや、周囲に溶け込もうとしているのは分かるけれど、客の半分以上が同じようなことやつてるド素人じゃ、さすがに気づくでしょ。あとイケメンは帰れよ。お前隠れる気ないだろ。

「えーくんえーくん。はい、あーん」

気づいていないのが、約一名いるけども。

木乃香さん自重してください。そんな期待した目を向けないでく

ださい。

後ろで、きやー、とか言う声が聞こえたんだけど。イケメンの同類ですか。顔がいい人たちは中身が残念じやなきやいけないっていうルールでもあるんですか。

あー、帰りたい。

何が一番僕を帰りたくさせるのかっていふと、ダントツで、カウンターに座っている知り合いで、自宅警備員だらう。コーヒー飲みながら新聞読んでいたはずなのに、気づいたらこっちに向かってサムズアップしてるし。自宅警備はどうしたんですか。偉い人に怒られても僕がばえませんからね。

どうすんのこれ。衆人環境で「あーん」ですか。このフォークに巻き取られたナポリタンを食せと？  
僕を悶殺させる気ですか。

ええい、もうどうにでもなれ！

アホウドリが鳴いている。

あほー、あほー、て。

おーいアホセンサー、仲間が呼んでるぞー。

⋮

.....

燃え尽きたぜ……。

現在、僕と木乃香は公園のベンチになりあって座っている。時刻は夕方。

木乃香からの「あーん」攻撃が終わつたと思ったら、今度は「あーん」おねだり攻撃だつた。僕は死んだ。遺体は市中を引きづり回された挙句、こうやってベンチさらしの刑に処せられている。

それに加えて、諭吉がまた一人僕の元から去つていった。この厳しい現代とともに生き抜いてきた戦友の彼だつたが、きっと僕にあきれたのだと思う。でも彼は無口だから何も言わなかつた。僕と彼は友達だつたけど、ついぞ話すことはなかつた。

一体、今日だけで何人の男たちから爆死しようと願われたのだろうか。諭吉もそう願つたのだろうか。

僕はもう死んでいるというのに。

向ける場所のない彼らの不満が、僕一人の処刑で収まるはずがないのだ。むしろ今日のことで燃え上がつただろう。そして魔法使いたちが麻帆良を変えるのだ。中世のレジスタンスのように。

ははは。

僕は歴史の礎となつた。

「なあえーくん」

「なんか僕が苗くんになつたみたい」

「そーやねー」

「……」「めんなさい」

謝るときはきちんと謝る。  
それが男つてモノだらう。

『めんなさい無駄に恰好つけて。

「……えーくん。ほらあれ、一番座や」

「うん」

「……なんや寒なつてきたなあ、えーくんは大丈夫?」

「うん」

「……」

「……」

なかなか本題に入れないのは、木乃香も僕も同じだ。

言わなければならぬことは決まつてゐるはずなのに、最初の一  
言が口に出せない。

言つてことは、認めるつてことで。

それはこんなにも難しい。

「えーくんは」

「ん?」

「ウチのこと嫌い?」

「嫌いじゃないよ」

「好き?」

「嫌いじゃないよ」

「……えーくんのあほ」

「ごめん、木乃香。

でもその言葉は僕が言つわけにはいかないんだ。

友達としての感情だったとしても、認めてしまえば線引きが狂ってしまう。優先順位をしつかり決めておかないと、最後にはすべて失つてしまつから。

それに、伝えればそれは事実になつて期待が生まれる。

木乃香が立つてているところは危うい場所だから、いつだつて味方になつてあげられるわけじゃない。裏切られるのは、初めから信頼がないことよりもずっとつらいんだよ。

「ごめんね木乃香」

「どしたん?」

「……ごめんね」

木乃香から逃げて。

「なあえーくん」

苗くんなんて言わない。

木乃香がそれを望まないから。

「なんでお星様は光つてるんか知つてる?」

「そんなの

燃えているから。

直線的な答えを返しそうになつて、やめた。

そんな答えは全然恰好よくない。青春じゃない。

僕が答えあぐねて一分ほどして。

勢いをつけて木乃香がベンチから立ち上がる。スカートひらり、半周回つて腕は後ろで組む。僕を覗き込む、にいつとした顔。頬上げて。初めて僕に見せてくれる一面。京美人っぽくない、どこにでもいるような、ここにしかいない笑顔の美少女。中学生らしい等身大の姿で、僕の前に立つ。

「時間切れや。えーくんは答えられなかつたので宿題です。提出期限は分かるまでにしたるから、ちゃんと調べてウチに報告すること

「……了解です。お姫様」

「じゃ、ウチはもう行くわ

とてとて去つていくお姫様。

その足が、公園の出口の車止めがあるところで、とまる。

「ウチの名前の呼び方に注意やえー、一股えーくーん

「……」

ボリュームに注意やえー、エセ天然このちゃーん。

気づかない振りしていただけだつたのか、尾行クラスメイトに。僕が一股男扱いされるつて分かつていてこんだけ振り回すつて、鬼ですか。可愛いですよもつ。

「はあ

宿題ビデオですよ。

女の子は時々、男の僕には理解不能になるのだ。

「なあ、あなたはどう思つ

「……」

「答えなんて期待してなかつたけビカ」

「……」

「寂しいぜ」

僕たちの背後に立つと立つていていた彼に尋ねても、やはつところが、  
答えは得られない。

顔色が青を通り越して黒くなりかかっているから仕方ないのかも  
しれない。

「最近調子はどうつよ」

「……」

「そつか。それは奇遇だね。僕もこの前炭酸のシャワーを浴びたば  
かりなんだ」

「……」

「頭皮は心配なつよ。あんたらと違つてリアルタイムで補修されて  
くから」

「ねえママ。あのお兄ちゃん銅像をとお話してくるよ  
「見ちゃいけません」

「……」

さて、女子寮である。

そびえ立つ威容を見上げて首を痛くしたりはしない。今日はすでに三日目である。

三日目であるからこそ片付けねばならぬ問題もあるわけであり、今日は早めに潜入する心積もりだつた。  
この件について木乃香嬢を恨む気持ちは一切ないことをここに記しておく。

Q ここひでどこだよ。

A、女子寮の前です。

……まあいい。

現在地の地面に注意書きをしている暇はない。

今はとにかく女子寮への潜入が最優先任務である。

「アーヒールー、不審者発見したよー。たすけてー」「ちょ、サバサバ！？」

任務失敗。

サバサバによって女子寮の管理人室に突き出された僕は、管理人さんの前で正座をしている。

「で、キミには本当にやましい気持ちはなかつたのかね」「はい」

「ではなぜ、庭の植木に隠れて寮の中を窺つていたのかね」

「それは……」

「答えられないのかね」

「……僕には、青春の探求者としてのプライドがあるんです」

そう。僕は「青春を探そうの会」のメンバーなのだ。  
女子寮を見たら忍び込まずにはいられない……ってわけじゃない  
んだけど。

マヒル先輩がアヒルに固執するように。サバサバがカツプ麺に固  
執するように。二人には及ばないけれど、僕だつて青春を求めてい  
る。

「さいばんちょー、被告人にいしゃりょーを要求します  
「発言を許そう」

サバサバ、刑事裁判と民事裁判が混ざっちゃってるよ。

「おりー、JのH口餓鬼がー、新しいポット買つてくれないと泣く  
ぞー」

それはちょっと買わざるをえないね。

「……と、いひことらしごが？」

「すみません裁判長。僕にはもひ諭吉がいないんです。裁判長が僕につけている野口さんがたぶん十人くらいいると想つので、それでお支払いをお願いします」

「……」

「飽きた。帰る」

サバサバが管理人室を去つていく。

残される僕と管理人さん。

「裁判長、自分の部屋を覗き込むのは罪になるのでしょうか」

「ならんだろうな  
ですよねー」

「Jのネタは僕もちよつとどづかと思つた。

管理人さんとサバサバに乗せられて、参加してみたけど、使い古された感もあつて微妙だ、といつのが正直な感想。

日常の何もかもを、フィクションのように面白く彩りたいといつ青春依存症。

若氣の至りとも、言えるかもしれない。

とにかくそんな現在進行な黒歴史。

「ところでエリイくん」

「何です、裁判長」

「昼間の女の子とはじこまでいったのかな?」

「ちょっと近所の公園まで」

「ただいまー、千鶴」

「遅かつたじやん。ナンバークーベルはしつかいつ観察ができた?」

「うん。アヒルと裁判じりもった」

「……鳥?」

### 003・苗くこと仲間な愉快たち（後書き）

木乃香のキャラも京都弁も分からぬ……。  
これでいいんでしょうか？

違つたとしても作者の木乃香さんのイメージはこんな感じなんで、  
簡単には直せないんですが（汗  
京都弁は指摘があればすぐに直します。

ここでひとつ、麻帆良全域を覆う結界について簡潔に説明しておけ。

結界の主な効果は二つ。

一般人に対する認識阻害。そして、外部からの侵入者の察知。

しかし、麻帆良のトップは大妖怪である。（サバサバ談）つまり麻帆良はぬらりひょんの領土であることを考慮せねばならず、結界にもぬらりひょんによるぬらりひょん的な何かの仕掛けが施されているのかもしれない。（マヒル先輩談）。

確かにぬらりひょんは侮りがたしの称号を持つぬらりひょんなのでそれも納得である。キングスライム並みにすごい。程度が分かりにくいとか言つた。僕だって分からない。

「キミも大概失礼な人だね」

イケメン的な何ががイケメン的な何かを言つているが、僕はこれでもエアーリーディング検定とスルースキル検定の有段者なので、ここは華麗に決める。

「あー今日も空が青いなー」「星空すら見えないけどね」

辺りは真っ暗だが気にしない。

話を戻そう。ぬらりひょんがいくらぬらりひょんであつたとしても、やることやってくれれば、下つ端の僕には関係ないことだ。だからこの際スルーする。僕はこれでもエアー以下略スルー以下略。

ちなみにこのエラー以下略スル。以下略はマヒル先輩とサバサバが問題作成、実施を行なつたローカルな大作なのだが、僕は以下略以下略なので以下略。つまり以下略。

以下略。

以下略。

以下略。

くどい。

つまり言いたいことがそれである。

麻帆良大結界のせいでツツ「ミミ要員が過疎ってる。  
僕の自虐からも分かるだろ?」  
分からぬ?

「それは残念」

「……何が?」

おっと。

「イケメンの顔が」

「……それって俺のあだ名、なんだよね」

イケメンなだけあって、僕が提唱したあだ名が広まるのは早かつた。一週間で二十人弱は、かなりの成果と誇つていい数字のはずだ。さすがイケメン。名譽なあだ名のはずなのに彼が不満そうにしている理由が僕には分からない。

「もしかしてキングイケメンの方が良かつた?」「もっと悪いわ!」

違うらしい。

まあ誤魔化せたからいいや。

認識阻害のおかげでツツコミ連員が少ないという話。

具体的には、女子寮の階数が春休み中のうち三日間で一階増えていても、僕のクラスメイトの中でそのことに明確なツツコミの姿勢を示したのはひとりだけだったほど。

余談だが、彼女のフォローはルームメイトのサバサバが念入りに行なつたらしい。

既存の建築物を上に伸ばすって、かなりすごいと思う。やばいとも思う。大丈夫なんだろうか、耐震強度的な意味で。それをカバーする技術力は僕のクラスメイトのト丸さんを見ていたければ、分かると思う。

部屋数に余裕が出来、そこに転入組の男子生徒たちを入れる。

こんなことをする学園長の意図が僕にはよく分からぬけど、不自然さは結界のおかげで感じられず、それを感じ取ることのできる人間で学園長に意見できる人間はほとんどない。

ちなみに僕は飛び入り参加だつたため、部屋が用意できず、今年からマヒル先輩が住み込むことになつた管理人室とその奥の扉から続く居住スペースに住まわせてもらつてている。同棲と言つことながれ。ルームシェアである。僕を転入組にねじこんだのはマヒル先輩だからそのくらいの責任は取つてもらわないと困る。

マヒル先輩が女子寮の管理人になっていることについてはもう諦めるしかない。彼のシスコンぶりはすでに女子寮内に広まつてゐるようで、妙な信頼をされている。新しく入ってきた転入組の男子たちよりよっぽど信用できるのだとか。

入寮二日目で荷解きを終えないまま女子校に入学を果たした僕は、五日目にしてようやく荷解きを終え、十日目の今日、麻帆良の森の中に立つてゐる。

繰り返すようだが、麻帆良大結界にはふたつの機能がある。  
認識阻害についての機能がひとつ。

もうひとつが、外部からの侵入者の察知。

麻帆良は関東魔法協会の本部で、トップもここにいる。となれば必然、東と不仲な西の過激派がやつてくる。そうでなくたって、最新のものから大戦以前の貴重なものまで多数の書物を収めている図書館島があるため、それを狙いにやつてくる身の程をわきまえないトレジャーハンターもいる。

そんな奴らを察知するのが結界の役目。

交戦し排除するのが、魔法先生や僕たち魔法生徒の役目だ。

関西呪術協会からの正式な指令書は確認済みだ。ボスからの手紙も来ていた。出張扱いしてくれるらしい。ボスに感謝。

「こ」の仕事が終わったら、B S S の自販機探して缶コーヒー買つんだ

「こ」の仕事が終わったら、彼女と結婚するんだ

……イケメンのくせに彼女とか（笑）。

「やつぱりそのあだ名悪口だよね！？」

「あれー？」

「しつかりと口に出てたから」

納得。

しかしこれには色々と深いわけがあるんだ。一人でわざわざ死亡フラグを立てるくらい深いわけが。

「せっかく乗つてあげたのにまともな反応しないし、変なあだ名は広めるし。この機会にキミには俺との接し方を、……語つてやる予定だったが、どうやらひそひそも言つていられなくなつたらしい」

「侵入者？」

「おそらく」

イケメンは「——」になつて、ポケットから薄い板を取り出した。通信機だ。大きさ太さは最新式の携帯（麻帆良製）と同じくらい。でも通話のみに絞つて機能を比較するなら、この見た目何の変哲もないただの黒い板が圧勝する。

発信機としての役割も果たす優れもの。

どこでも使える壊れない無線を目指したものらしく、科学と魔法のどちらの方面からの妨害があつても、常に最高の音質で通話できると説明された。子機であるこの板からは親機にしか通信できないが、戦闘時の緊迫した状況での連絡を想定すると、発信の際に通信相手を選ぶ手間が掛からなくていいとのこと。

当番の者は各自必ずこの通信機を携帯することになつてこる。

「——から神海、状況は？」

『そこから北西一キロの地点に侵入者です』

この通信機、必要がない限りは常にスピーカーモードになつているので会話の内容は僕にも聞こえる。

「応援は？」

『予想到着時刻は戦闘開始から十分です』

「了解」

通信を切り、通信機をしまつ「——」。

「行くぞ弾場。十分で終わらせる。足手纏いになるなよ」

「あいよー」

お前もな、なんて言わない。  
なんかそれって青春っぽいから。

こんな戦闘の日常が僕の青春だなんて、最悪だよ。

えーくんと神海のペアが敵と交戦中。  
そんな通信をもらつたのが十分ほど前。

本来、救援要請もないのに別の区域の担当ペアが援護に向かつたりすることはない。しかし彼らは魔法生徒のみのペアの上、一年間一般生徒として生活をしていたえーくんの実力を疑問視する声も上がり、初回のみ、担当区域も近く、一人のクラスメイトであり、もしもの時に連携も取りやすいだろうということで（クラスメイトだから連携が取れるという論理が私にはいまいちよく分からぬのだが）、私と龍宮のペアが様子を見に行くことになつてゐる。

私としては、神海レイジの実力を疑わないで、えーくんの実力だけを疑うのはちょっと不満だ。「悠久の風」に所属しているからなんだつていうんだ。えーくんだつて十年以上も神鳴流を修めているんだ。

「えーくんは顔がいいだけの男になんか負けない」

「いや、弾場と神海はペアだからな」

「えーくんは真面目ではなかつたし、太刀筋もいまいちパツとしない人だつたけど、ちゃんと私と一緒に修行もしたし、一緒に雑魚寝したことだつて……！」

「桜咲、途中からのろけになつてゐる」

「……どこが？」

「ダメだこいつ」

私も龍富もそれほど心配しているというわけでもなかつたから、そんな話をしながら森の中を走り、そして現場に到着。

「なあ龍富」

「なんだい」

「私たちが来る必要は……」

「なかつたと思うよ」

侵入者と思われる、身体に大きな光るネジが数本生えた男を拘束する神海。その向こうで、残党である消えかけている鬼、こちらも脇腹と肩からネジが生えているが、その鬼と交戦……ワンサイドゲームをしているえーくん。

それが私たちの見た現状だつた。

アレを使う必要すらなかつた。

事前に聞いてはいたが、コーミの使う術（？）はかなり便利で、そして特異なもので、中空に光る巨大なネジを生み出し、自動追尾機能を持つたそれを相手に刺すというものだった。生み出したネジは、物理的な衝撃は発生させるが肉体を傷つけることはできないというワケの分からぬもので、さらには刺された者の身体能力や魔力や気を神海と同じレベルまで下げるというオプション付き。

学園長も言っていた通り、確かにこの術は西洋魔術などではない。日本固有の呪術にも相手の魔力や気を制限するというものがあるが、コーミの使う術ほどお手軽にとはいかない。

イケメンは、不思議ちゃん属性を持ったイケメンだつたらしい。うええ。

本人は、ぶつくめーかーかつこかいとか、神様から貰った能力だとかほざいていた。このことからも彼が不思議ちゃんであることが窺える。

中身はどうあれ、便利な術のは確かで、僕はコーミと同じレベルまで肉体が弱体化した鬼たちをばつたばつと切り倒していくだけよかつた。

初めは偽装のため、ボスに引き抜かれてからは護身のためにたしなんでいる神鳴流だが、さすがに十年もやっていると実戦に耐えうるレベルにはなっているのだ。こんな敵を相手にヘマをしているようでは、後で応援に来ることになつている刹那に何をされるか分かつたもんじやない。昔のように「修行だ特訓だ」とか無駄に情熱を燃やして剣術に打ち込むのは、ちときつい。

……最後になつた鬼一体を還して、本部に通信を行なつているコーミのところに行く。

「はい、侵入者を無事拘束したので、回収のための人員をお願いします」

『その位置だと一十分ほど掛かりますのでそれまでその場で待機していてください』  
「了解です」

通信を切り、ポケットに。

「おつづー、コーミー」  
「おつかれ。……今は神海なのね」  
「は？ だつてコーミーはコーミでしょ」  
「それを教室で言つてほしかった」

初任務が何事もなく終わったというのになぜかしょぼくれるコーミ。やはり彼の倒す分も鬼を残してあげるべきだったんだろうか。鬼との本気の殴りあいってなかなか経験できないよね。あ、でも、あの術はコーミの術なんだから、コーミーは鬼との殴り合いには慣れていいるのか。

「いや、せっかく自分の力に頼り切つている相手を弱体化したんだから近代武器使おうよ。拳銃とか」  
「おー、そーか。コーミーって気は一般人レベルだし魔力に至つてはほとんどゼロだから、銃が凶器に変身するわけだ」  
「拳銃はもともと凶器だけね。それと俺のネジを受けたわけでもないのに、気も魔力も俺とほとんど変わらないキミにそんなことを言われたくはない」  
「あはは」  
「……」  
「あはははー」

侵入者の男が無事回収され、再び森の中で一人、侵入者を待つ。

「そういえば、あの光るネジってどのくらい残り続けるの？」

「俺が消そうとしなければ一日くらい」

「……可哀想に。頭にネジが刺さった彼はフランケンというあだ名と一生付き合っていくことになるんだね」

「俺はお前の頭の中が可哀想だ」

「イケメンも同窓会とかで『あ、イケメン（笑）じゃん。ちょーウケるー』とか言われるんだよきっと」

「……」

可哀想に。

## 004・「元なつた夜に」（後書き）

イケメンの能力は「めだかボックス」より。作者は「めだかボックス」も知らない。けど「却本作り（ブックメイカー）」は知っている。ただし詳しく知っているわけじゃないので不自然な点を指摘されても修正できません。本作品に登場するのは「却本作り（改）」ですから。

## 005・サバイバルって辛いよね。（前書き）

いろんな「ネギま！」の一次創作を見てきたけど、中一の時のキャンプの話を読んだことはない作者。もしかしてキャンプはないって設定でもあるのでしょうか？

## 005・サバイバルって辛いよね。

女子校生活といつても、所詮は周りの学友たちの性別が変わった  
というだけ。真新しさに心震わせるのは初めの一週間くらいで、そ  
れを過ぎてしまえばもう今までの男子校生活と差異はない。クラス  
からちょっと浮いてるってだけで。

まあ僕が浮くことによって誰かさんが学生生活を堪能できるのな  
ら安いものだ。

非日常が日常になりつつあつた四月下旬。

青春探求家の僕としては、そろそろ何かをしなきやいけないなつ  
て思っていたけど、その何かに明確なイメージがないつてのが青春  
な由縁であるわけで。漠然とした不安はいつも胸の内に寄り添つて  
いた。

そんな僕に朗報。

きつかけはクーフェだった。

「エリイ、ちょっとといいアルカ？」  
「アルアル」

クーフェは「古」に、なんかうねうねした文字を書いてクー・フ  
エイって読むらしいけど、漢字が難しくてよく分からぬアル。留  
学生で中国武術（？）の達人、中国系だと思つけど、本当のところ  
はよく分からぬアル。

「それはよかつたアル」  
「アルアル」  
「ゴールデンウイークは、」

「あるアル」

「……」

なにこの可愛い生物。

と思つたけど口には出さない。

だつて僕は青春探求家ですから。

関係ないだろとか言わない。

なーんて脳内会議してたら、後ろからはたかれた。

「ちょっとエリイ、あんた何クーフェ泣かせてんのよ」  
「そいやえ、えーくん。女の子いじめたらあかん」

丸めたノートで頭を叩いたのが神楽坂明日菜。通称バカレッド。きちくのしょぎょうやえー、と言いながら僕の脇腹を指でツンツンこじめているのが木乃香。木乃香と神楽坂はルームメイトで、よく一緒にいる姿を見かける。

ちなみに僕のエリイというあだ名は、イケメンがイケメンであるのには及ばないけど、サバサバを発端としてかなりの速度で広がった。でもえーくんの方は言わずもがな。刹那だけは僕のことを「えー弾場」って不思議な呼び方してるけど、接頭辞「えー」が表す意味を答えなさい。制限時間は十秒。配点は三点です。

解答？ 知らないよそんなの。

「私としましても今回の事件はまことに遺憾であります  
「ちゃんと謝りなさい」

足を踏まれた。神楽坂踏みつけだった。

「謝るとさはあちんと謝る。それが男つてモノなんだぜ」「で？」

「『めんなさい』クーフュさん僕が悪かったです泣かして悪かったです許してください」

「……泣いて、ないアルヨ」

上目遣い強がりクーフュ。

これやばい。

教室から出て行こうとしていたイケメンが爆発した。

僕は彼の死を無駄にしないためにも必死に耐えた。

木乃香と神楽坂は苦笑いしていた。

だからなおさら倒れるわけにはいかなかつた。ここで倒れたら、僕たちが無能だということを証明しているようなものだ。僕たちは必死にこの青春時代で心のサバイバルを繰り広げているのに「男子つてバカよねー」の一言で済まされる屈辱を味わつてなるものか。

「ほんとアルヨ?」

無駄な抵抗だった。

どうする?

たたかう  
どうぐ  
こうたい  
にげる

いけめんはしんでいてこうたいできない  
どうする?

たたかう  
どうぐ  
こうたい  
にげる

ほんとうに にげますか？

YES  
NO

のろわれていて にげられない  
くーふえ の じうげき！  
えりい は しんだ

しんでしまつとは なにじとだ

仕方ないんです先生。  
それが男つてモノなんだぜ。

世の中つて綺麗なことばかりじゃない。

イケメンだつてトイレに行かなきゃいけないし、僕だつてそうだ。  
そんなわけで転入組の男子生徒たちは職員室の隣にある職員用男子トイレを使つてゐる。先生なのに男子などころに突つ込んでい

けない。正式には男性用トイレとでも言つのだらうか。

死んでしまつた僕を教会で復活させてくれるような誠実な神父さんは麻帆良にはいないので、男子トイレにてよみがえらせてもらつた。これも「くーふえ の のろい」が、死ねば自動的に解除される良心的な設計だつたおかげだらう。

僕は掃除道具入れにあつたモップを装備し、再び魔王と相対するため旅に出た、なんてことはない。

廊下はもう夕暮れに染まつていた。

教室の前に着くと、ちょうどサバサバが出てきた。いまだ入口附近で倒れているイケメンのことは完璧スルーだつた。

愛の反対は無関心。

「脳みそリストラするべき」

僕はイケメンに勝つた。むなしさが残つた。

「僕はお前らを捨てたりなんかしない！」

「…………」  
「もしかして、再構築リストラクションつて言いたかつた？」

さばさば は にげだした

今日授業でやつたもんね。restoration=再構築つて。授業内容を自分のものにしようとするその姿勢は高評価だと思うよ。

教室に入る際にさりげなくイケメンを踏みつけて（愛の反対は無関心だ）、何事かを話しあつてゐるクーフェ、木乃香、神楽坂と忍

者のもとへ戻つた。いつの間にか一人増えている。

「エリイ殿、無事だつたでござるか」

「ちょっと神殿トライで復活してきた」

「重置でござる」

神楽坂が丸めたノートを持った手をふるふるさせていたけど、なんだつたんだろう。

がたん、とイスを鳴らしてクーフェが立ち上がった。

「私、大人になるアル！」

そのセリフはバカレンジャーを卒業してから言つべきだと思つ。

がたん。今度は神楽坂だつた。

肃々と僕の方に歩いてくると、にっこりと笑つた。神楽坂踏みつけだつた。さすがバカレンジャーなだけある。敵認定された奴らは容赦なく殺すヒーローモノの残酷さを兼ね備えている。

「エリイ、サバサバをかけて私と勝負アル！」

さつきの一幕は流すらしい。

「……そもそもこの国の憲法にはどんな人間でも皆等しく同じ人間だという記述があつてだな」

「まさかエリイが眞面目に返してくるとは予想外だつたアル」

「失礼な。僕だって眞面目にやることくらいアル」

「やっぱり眞面目じゃなかつたアル」

がたん。神楽坂だつた。神楽坂踏みつけだつた。

「木乃香、僕にはよく分からんだけど、なぜかさつきから足が痛むんだ」

「奇遇やなー。ウチにもよう分からん」

「神楽坂さん、僕にはよく

「死人に口なしよ」

……

……

「明日菜はなー、きっと『罪人にはあれこれ文句言つ權利ない』と言おうとしたんやつてウチは思うんよ。明日菜は悪くないんや。理解してあげれんかったウチらにこそ責任が」

「やめて木乃香、惨めになるだけだから」

「話が全然進まないアルー」

困り顔クーフエ。

「エリイ殿！」

今度のチャレンジヤーは忍者だった。

「3・Aの有志で、今度の『ゴールデンウイーク中にサバイバルキャンプを開くことにしたので』」ざるが、エリイ殿は参加いたすか?」「もち

攻略終了。

エリイ城は陥落しました。

.....

「ちなみになー、『大人になる』いうんは『大人の狡猾さを獲得する』いう意味で使ったんや。眞面目に話を聞いてくれないえーくんもサバちゃんが絡めば話を聞いてくれるかなって思つたらしいんよ。それで『狡猾さ』や。でもそのまま使うのはひねりがないからゆーて、『大人になる』って言つたんやつて」

「へー、クーフェの言葉にはそんな深い意味が

「あんたたちはそれをわざとやつてるから性質たちが悪いのよ……」

「何のことや、明日菜？」

「もういいわよ」

この日、夕暮れの教室で物憂げにため息をつくバカレッドの貴重な姿が目撃されたとか。

なぜサバイバルキャンプなんてものを開催することにしたのか。まずはそこから説明するべきだろ。

忘れている方も多いと思う。中学一年といえば、日本の学生のほとんどなどが経験するあの重大なイベントが開催される年である。そう。

キャンプ。青春時代を生きる僕たち中学一年生にとって忘れようにも忘れない出来事になるだろう学校行事。そのための練習がサバイバルキャンプver.2-A。

ところで、麻帆良学園女子中等部のキャンプは五月中旬に行なわれる。

お祭り大好き2-Aの面々が、このイベントを忘れるはずもない。（「アルデンウイーク明け、キャンプの直前に行なわれる中間テストについては、眼中にない生徒が多い」と思われるが…）

とにかく、キャンプである。  
そしてこの麻帆良流キャンプ、さすが麻帆良と形容すべきことだ  
一點。

リアルキャンプであるところ」と。

一般的な中学一年生が経験するような生ぬるいキャンプではない。僕らを優しく包み込んでくれる母なる大地、大自然を味わうなんて機会じゃない。味わうのは自然の冷たさ、僕らへの無関心さ。生きるということを学ぶ。

それが厳しくも優しい麻帆良流キャンプだ。  
サバイバル

なーんて恰好つけてみたけど、要するに毛布とテント渡すから、あとは勝手に生活しろという企画。

食料の持ち込みは可だし、調理器具も可。おやつの価格制限もなし。

むしろそこらへんに生えてる草とかキノコとか果物っぽいものとか食べたい場合は、キャンプに同行している専門のインストラクターの許可を得なければならない。

中学生のキャンプなんてそんなもんです。

大抵の学生たちがスタート地点近くでテントを張つて、あとは黙弁つて終わり。

……でも、2-Aの奴らがそんなことで終わるはずがない。

きっと「ジャングルの奥地の未開地域を探検だー」とか言つて、無駄に頑張つてしまふに違ひない。

日本にジャングルはないとかツツ「ミミ入れる奴は、青春的に負けている。

いいじゃないか、ジャングルじゃなくとも。未開じやなくとも。大事なのは楽しみたって気持ち。だってこの時間は人生に一度しかないものだから。バカみたいでも、アホなことしか起こらない日常でも、僕は楽しんで過ごしたい。だって僕は青春探求家だ。こんな恥ずかしい肩書き、バカじやなかつたら名乗れないだろ？

ガラにななく熱く語つてしまつたあの時の自分を回想するといつと死にたくなる今日この頃。でも僕は自重しない。こんなことで死ぬくらいなら初めから青春を求めたりなんかしない。  
なんてことを思つた自分に死にたくなるつていう無限ループ。

青春つて青いなー。

ところで今朝は生憎の曇り空だつたけど、だんだん晴れてきたね。この調子なら夜には星が見えるんじゃないかな。

聞いてない？ ですよねー。

でも僕は思うんだよ。なんで同じ寮に住んでいるのに現地集合にするのかなって。だって同じトコに住んでるんだよ。わざわざ同じ場所から出て、同じ待ち合わせ場所で無意味に時間潰すくらいなら、みんなで一緒に行けばよくない？

確かに集団で移動するっていうのは迷惑になりやすいんだけどさ。

分かってるよ。うん。分かってる。

でもそれに納得できるかつて別だよね。

中学校で集団登校しない理由を持ち出されると、僕としてはちょっと反論が思いつかないんだけどさ。

例えばさ、デートの時に約束の三十分前から待ち合わせ場所で待つてるとかよく言つじゃん。そこで相手を待ちたいつて気持ち。あれは理解できるんだよ。

でもこれデートじゃないじゃん。本番のキャンプのための練習だよ。本番でスタミナ切れ起こさないためにも、ここはいつものペースで通過すべき場所だと思うんだよ、僕は。

「ちょっとエリイ」

「ん？」

「あれ

神楽坂に声をかけられた。彼女が指さした場所に目を向けると、僕を見て震える一人の女子生徒の姿。

ぶつちやけ、綾瀬夕映と宮崎のどかだった。

「ゆ、ゆえー」

「大丈夫ですのどか。お化けは昼間に活動できないと聞くです

「でも、それならエリイくんは誰と

「あの人はちょっと頭がアレな人なので仕方ないのです。あれは独り言です。私が保証するから安心するです」「

「よ、よかつたあ～

あれえー？

「うわ。なんかこっち来たです」

「どどど、どうじょり、ゆえ～」

「逃げるが勝ちです。行くですのどか」

「ま、待つてよ～」

……

「自業自得よ。慰めないからね

「じー」

「な、なによ？」

魂の抜けたような瞳で見つめていると、神楽坂はたじろいだ。

「じー」

面白いので続ける。

「じー」

「い、今回は間違ってないはずよ」

「本當に？？」

何のことか分からぬが取りあえず、神楽坂に会わせておく。

「えー？ だつて自業自得ってそういう意味じゃ……。もしかして

違つのー? や、や、エーハヤ、え、でも間違つてないはず。

「……本当に?」

何の」とか分かつたが取りあえず、神楽坂に会わせておく。

「もしかして自問自答。いやそれはないわよね? でももしかしたら……。あーわかんなくなってきた。自画自贊?」

「自由の女神」

「それはない」

ぶつぶつ悩んでいたヒカルは、手帳を開いてあげたのと、即座に切り捨てられた。

「……自業自得で合ひ切るよ」

「よかつたー」

胸を撫で下ろす神楽坂。

その笑顔が……その、心拍数に影響大です。  
と思つていたら、すぐにこちらをじとーって睨んでくる神楽坂。  
名残惜しいなんて思つてない、はず。

「じゃあなんで」

「なんでかなーと

「何が」

意味もなげくはぐりかそつとしてみたけど、やっぱ意味はなかつた。

「いや、綾瀬たちは僕のこと怖がつてたのに、なんで神楽坂は……つて」

「さあ？」

分からぬのかよ、自分のことなのに。

「そんな目されたって知らないわよ」

「じー」

「……私はあんたみたいなアレな人でも受け入れてあげる心の広い女なの！」

「うわー」

「なんでそんな目で見るのよ！？　あんたが言えつていうから私は

「Jのちゃんチヨーップ」

神楽坂が暴走し始めたところで、木乃香の助け舟が後頭部に直撃。僕は座礁した。ヒーロー漫画の敵の怪人が倒れる感じで地面に伏す。ぐへえ。

「たつたいま神楽坂明日菜一人仕入れたえー。誰かー、出来立てほやほやの明日菜はいらんかえー？　安くしとくえー」「ちょ、ちょっと木乃香！」

ナイス木乃香。そのまま神楽坂を引きずつていってくれ。

「だいじょーぶ？」

よく分からぬ何かに敗北した僕を心配してくれる女の子、サバサバ。

でもね、サバサバ。僕の手を踏んでたら、全部台無しだよ。

集合時間五分前、十四時五十五分。

いつもこうときは無駄に行動力がある2 - A。  
遅刻者なく、全員集合完了。

「みなさん、これで全員そろいましたわね」

『おー』

合図。やっぱいつもときは揃わないとね。

「それではここからはクラス委員長である私、雪広が引率を務めさせていただきますわ」

引率つて言つても田の前の建物に入るだけなんだけどね。

『キャンプの大山』

文字通り大山さんが店長を務めている（未確認情報）キャンプ用品の専門店だ。キャンプ用品専門って採算取れるんだろうか、という疑問は抱いちゃいけない。それが麻帆良クオリティ。

しかしこの大山、ただの大きいだけの山となめちゃいけない。なんと、大山はキャンプ体験ができる大山なのだ。キャンプ大山はキャンプ用品の専門店であると同時に、店の背後にある、店長直々に

切り開いた（未確認情報）麻帆良の森林地帯を用いてキャンプ体験まで出来てしまつという採算度外視の店なのだ。

田舎へ行くとたまに見かけるキャンプ体験ができる旅館の、店舗バージョンである。でもあれは土地代が安いから商売として成り立つのであって麻帆良で同じことをやっても利益が出るとは思えない。

が、麻帆良の人たちの性質ゆえか、潰れずにやっているみたい。

考えてみれば、僕たちが、その「麻帆良の人たち」の筆頭なのだろう。

普通の中学生はキャンプがあるからといって、休日を潰してまで予習（？）をしようとは思わない。

とにかく。

そんな『キャンプの大山』に僕たちは来ていた。

いいんちよさんを先頭に、みんなでキャンプ用品が所狭しと並ぶ店内を通り、店の裏口を抜ける。するとそこには草の一本も生えていない過酷さを体現したような大地が広がっていた、なんてことはない。草抜き・除草剤散布を怠った小学校の校庭くらいのものだろうか。広さもそのくらい（麻帆良基準にあらず）。サバイバルな要素がゼロだ。

期待していたメンツには悪いが本番のキャンプの練習なんだから、安全安心設計じゃないと。ちゃんと森の奥のほうに行けないようフレンスも張り巡らされているみたいだし。及第点かな、と専門家気取りで評価してみたり。

「では、みなさん。ここからは自由行動となりますが

うんぬん。

いいんちよさんが細かく注意事項を説明してるけど、聞いている奴なんてほとんどいない。話す内容とかしつかり考えてきたんだろ

うな。みんなが揃つまでカンペで最終確認してゐみたいだつたし。  
御愁傷さま。

「何か困つたことがあれば、私が、こちらにいらっしゃる副店長の  
北村さんに声をかけてください。北村さんは」

眼鏡を掛けた若い優男が手を振つていた。

いいんちよさんの話によると、北村さんは大学時代は登山部に所属して、キャンプの経験も豊富なんだとか。ぱっと見た感じからは見えないけど、筋肉のつき方とか、やっぱりそつち系の人だ。着やせするタイプなのか。

「これで一通りの説明は終わりですが、何かご質問のある方は  
いいんちよさん

拳手する。「これは是非、質問せねばならぬことがあります」

「何です弾場さん」

「店長の大山さんはどちらに」

「……店長の羽山さんは、今日は休暇を取られて、家族サービスにいそしんでいらっしゃいます」

おしい。正違いか。

「おしくない」

隣にいたサバサバに突っ込まれた。

内容がどうとかよりも、まずその事実が、なんというか色々ダメだった。

僕のおいしくもない質問はそれきりでスルーされ、北村さんが短い挨拶を一言して、解散となつた。

「これからは各自、夕食のカレーを作り始めるまでの一時間の自由行動。

無料貸し出しされているテントを組み立ててみるもよし。その中で昼寝するもよし。『キャンプの大山』店内に置いてある、野草やキノコについての本を読んで知識を深めるもよし。キャンプとの関係性は理解不能だが、ポール遊びをするもよし。修行するもよし。……お前ら何しに来たんだ？

とりあえず僕は一人用テントと一人用テントの一種を組み立てては片付けてを一時間繰り返すという変人タイムを経て、二種のテントのエキスパートになつた。

何がしたかつたんだろう。

反省中という紙を背中に張られている僕は、残りの一時間を筋トレに費やした。さつきの一幕は自分でも悪かったと思つてる。でも一度とやらないという保証はできかねます。

で、カレー作りの時間がやつてきて。

『反省中』な僕はひとりで正座。これはつらい。

ついで木乃香が僕のところにやつてきて言つたのだ。「えーくん、最近ちょっと調子に乗りすぎ」って。思い当たる節がないわけでもない。回想してみるとむしろ調子に乗つてたシーンしか思い浮かべられない。なんということだ。

それに加えて今日は木乃香にフオロー入れてもらつてしまつた。つまり自分の尻拭いすらできていない。

そんなわけで改めて深く反省した僕は、わいわいきやつときやな光景を前に正座で耐えている。今回はほんと反省しました。はー。

でも、これつてある意味ご褒美なのかも。

別に変態的な性癖に田覚めてしまつたわけじゃないことを先に言つておく。

だつて僕の前では花の女子中学生たちが楽しそうにカレーを作つている。火が上手くつかないとか、野菜つてどのくらいに切るのだとか、ルーツで何個入れるとか。騒ぎながら楽しそうに作つてる。イケメンは『悠久の風』の仕事があるみたいで、このイベントには参加できなかつた。相当悔しがつていたつけ。

だから、こんなに楽しそうな2・Aの面々の姿を見ることができるのは僕だけの特権。

他のどんな同級生も味わえない、僕だけの。

もちろん僕だつてあの中に入つていきたい欲求がないわけじゃない。

けど、実際に自分があの空間に馴染んでいる姿を想像すると、それもどうかなつて思う。これは僕が青春を追い求める理由にも直結していて、あんまり上手くは説明できない。

星が瞬き始めた空と、その下で火を囲む女の子たちをぼんやりと見ていた僕のもとにひとりの女の子がやってくる。

サバサバだつた。

彼女はこういうとき、いつも僕のそばにいてくれる。

僕が望んだ時にはいつだつてサバサバは僕のそばにやつてきてくれて、そのことにすこしだけ、どきりとする。彼女がどうしてこんなに鋭いのか、僕は知つている。彼女の苦しみの一端も。

そして、だからこそ、彼女は僕の数少ない理解者、おそらくたつたひとりの理解者で。

「たのしめる?」

「楽しめる、と、いいなあ」

「いや、僕たちは一緒にいる。

これが正しいことなのですか？ 分からないまま。

「えーくんえーくん。はい、あーん」

「あの、木乃香さん」

「あーん」

「これ、ルーの色が……」

「あーん」

罰ゲーム、なんだろ？

せめて幸せに死にたかったぜ。ちくしょい……。

……

……

『ゴールデンウイーク明け、麻帆良新聞の隅っこに『彼女の料理を  
食べて悶死した男』の姿を収めた写真が掲載されたとか。

005・サバイバルって辛いよね。（後書き）

タイトルには一重の意味があった。そんな第五話でしたー。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2165y/>

---

Blue;HEAd

2011年11月20日12時58分発行